

日本語会話授業における小噺活用の効果について

About the Effects of Using *Kobanashi* in Japanese Conversation Classes

五十嵐江理
Eri IGARASHI

鳴門教育大学
Naruto University of Education

要旨

日本で暮らす外国人住民の日本語のレベルは人により異なるが、レベルに関係なく、日々の生活で日本語が必要な場面が多々ある。そのため、まだあまり日本語が話せない初級レベルの外国人住民が、少しでも早く日本語が話せるようになる方法を考える必要があるだろう。そこで、日本語会話における「表現力」を育成することが、日本語会話能力の向上に大きく影響すると思った。そして、その会話練習において、日本の伝統話芸の「落語」、その中でも初級レベルでも理解に負担の少ない、短い「小噺」を活用することによる学習効果に注目した。本稿では、初級前半レベルの日本語学習者のクラスにおいて小噺を活用した授業の計画と実践の報告を述べ、今後の課題について考察を行った。

キーワード：日本語初級、会話、表現力、落語、小噺

1. はじめに

1.1. 日本人の人口の減少と外国人住民の人口の増加

総務省「資料2 住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数（令和4年1月1日現在）」¹は、日本の人口について、以下のように述べている。

全国の人口は、総計1億2,592万7,902人、日本人住民1億2,322万3,561人、外国人住民270万4,341人となっている。日本人住民は、前年（1億2,384万2,701人）に比べ、61万9,140人減少し、平成21年をピークに13年連続で減少した。また、外国人住民は、前年（281万1,543人）に比べ、10万7,202人減少し、令和3年から2年連続で減少した。

日本人の人口は、今後も減少していくと予想される。

一方、外国人の人口は、ここ2年で減少しているが、その原因は、新型コロナウイルス感染症による入国制限のためだと考えられる。しかし、令和2年までが増加していること、また、長期にわたる就労外国人を多く受け入れるため、2018年（平成30年）に在留資格制度を改正したことを考えると、再び増加に向かうと予想される。

1.2. 研究背景

日本人人口が減少し、外国人住民の人口が増加していくことで、地域による差があるとは考えられるが、身近に外国人住民がいて、彼らと交流する機会が増えていくだろう。その際に必要なのは、何かしらの手段によるコミュニケーションである。より良いコミュニケーションのためには、お互いのことをよく知る必要がある。「話す」必要がある。日本人が外国人住民と話すために、相手の母語で話せるというのは理想だが、

¹ 総務省（2022）。「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数（令和4年1月1日現在）」（最終閲覧：2022年10月15日）：https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/daityo/jinkou_jinkoudoutai-setaisuu.html

それを日本人全てに求めることはできない。そのため、話す際には、外国人住民に日本語を使って話してもらうことが圧倒的に多くなると推測される。しかし、外国人住民の日本語レベルは、人により異なる。外国人住民には、日本人と問題なくコミュニケーションができる人がいる一方で、ほとんど日本語が話せない人たちもいる。そのような人たちには、日本語を体系的に学習する機会も必要だが、日常生活ですぐに使える表現を身につけていくことも並行して行っていくことが求められる。このように、外国人住民の増加で、日常会話について学んだり練習したりする機会が必要となってきた。日常生活ですぐに使える表現の学習では、「場面シラバス」や「機能シラバス」に基づき、授業を計画することが考えられる。外国人住民が、日本の生活で遭遇しそうな場面で必要な会話表現や、生活でよく使用する会話機能で構成された授業計画をしていくことが重要になる。

日本語で会話ができるようになるということは、その会話場面で必要な単語や表現を適切に使用できることであるのはもちろんである。しかし、それに加えて、より相手に自分の意志が伝わるようにするには、「表現力」も必要ではないだろうか。例えば、感謝や謝罪、依頼などの気持ちをより良く相手に伝えるために、「表情」「体の動き」「話す速さ」「間の取り方」など、会話における非言語コミュニケーションの部分の練習も必要であるということだ。そして、その練習のために、筆者は、「落語」の要素を取り入れた会話練習をすることで、日本語の会話における「表現力」を磨くのに効果があるのではないかと考えた。

落語は、日本の伝統話芸で、かつ、内容は面白く親しみやすい。また、1人で複数の登場人物を演じるため、様々な立場の人の考え方を客観的に意識することができる。そして、テンポよく話すため、日本語のリズムを捉えるのにも役に立つ。このような落語の要素を日本語の会話練習に取り入れることは、日本語学習者の会話の表現力に大きく影響するのではないだろうか。日本語である程度意思疎通ができる学習者であれば、考えを言葉で伝えることができるが、初級レベルではそれが難しい。しかし、先に表現力を磨く練習をしておけば、使用できる日本語表現が少なくても意味が伝わりやすくなり、並行して生活に必要な会話表現を練習すれば効率がよいと考えた。つまり、日本語初級レベルの学習者の表現力を育成することが、日本語会話力向上に大きく影響があると考えられるのだ。そこで本稿では、その練習のために、落語、その中でも初級レベルでも負担の少ない短い「小噺」を使った会

話授業を計画し、実践した授業の報告を述べる。

2. 先行研究

私見では、初級レベルの日本語学習者の日本語会話の授業で、表現力を育成するために落語や小噺を活用することに注目した先行研究は、まだそれほど見られない。米本・曾我部(2012)は、「落語は『話芸』であることから、日本語教育に利用されることが多くなってきた。しかし、初級では、その『話芸』が日本語学習に取り入れられることは少なく、実践がほとんど報告されてこなかった」と指摘している。

会話の授業で活用するという目的ではないが、米国ミドルベリー大学夏期日本語学校、及び、イースタンミシガン大学での小噺口演を目標に授業活動を行った畑佐・久保田(2009)を、初級小噺の実践例として参考にしたい。

2.1. 畑佐・久保田(2009)

表1 畑佐・久保田(2009)の小噺の授業

対象	アメリカの大学生(日本語初級レベル)
目的	・四技能の上達 ・日本文化理解
活動時間	詳細な時間は不明だが、イースタンミシガン大学においては、75分×週2回の15週間のコースにおいて、4週目から落語/小噺活動を始めている。
主な活動内容	・小噺の選択、暗記、練習、発表 ・小噺の創作・発表会
使用した主な噺	・「どうもちばらくです」 ² の新作小噺集 ・学習者による創作小噺
主な成果	・四技能の上達 ・幅広い日本文化への理解 ・自律学習や協働学習

表1は、畑佐・久保田(2009)が行った小噺授業の概要である。畑佐・久保田(2009)は、「初級者でも扱える短い小噺を学生に演じさせるという発想を出発点に」、小噺を日本語の授業に取り入れた。そして、その理由を以下のように述べている。

- ・小噺はごく短い話なので、初級の学習者でも十分記憶することができ、学生への負担が軽い。
- ・小噺には母語話者である聞き手を笑わせるというはっきりとした目的があり、完結している。したがって、上手に出来れば聞き手は、お世辞ではな

² 千葉落語同好会(1999)。「新作小噺集」(最終閲覧:2022年10月15日):<http://tibaraku.web.fc2.com/kobanasi/sinhome.html>

く、本当に笑ってくれるという明確なゴールを学生に示すことができる。

- ・ただ短いと言っても、文脈なしでいきなり話を始め、それを完結させ、聞き手に無理なく理解させるためには、発音や台詞の間（ま）といった言語的な正確さが要求される。
- ・練習を繰り返すなかでの試行錯誤から、言語に対する創造性を発揮し、話に手を加える学生も出てくる。そして、学生間での話し合いの中から新しいやり方も生まれてくる。

初級の学習者にとって小断は、目的が分かりやすく、すぐに話し終わることができるという点で、負担なく取り組みそうである。そして、より相手に伝えやすくするための工夫を意識できるようになることが期待できる。

また、畑佐・久保田（2009）内で取り上げられている参加した学生からのこの活動に対する自由記述の中で、本稿では、以下の2点に注目した。

- ・自分の発音のあいまいさに気づいた。
- ・コミュニケーションには動作も重要だということが分かった。

小断の練習をすることで、相手に伝えるには発音について意識しなければならないこと、また、コミュニケーションを円滑にする要素に、動作の影響もあるということに学生自身で気づけたということが大きい。

畑佐・久保田（2009）の実践結果から、初級レベルの日本語学習者でも、小断活動ができ、その活動により、コミュニケーションに必要なスキルを磨くことができる可能性が示唆された。

次に、日本語上級レベルの学習者を対象にしたものではあるが、落語を日本語授業に取り入れることは、日本語能力の向上に効果があるか授業実践を行った、入戸野（2009）を取り上げる。

2.2. 入戸野（2009）

表2は、入戸野（2009）が行った小断授業の概要である。この活動の中で、本稿にとって注目すべきものが2点ある。

まず、「表現の工夫」についてである。落語は日本の古典芸能であり、それぞれの断は現代ではなく、多くの人が着物で生活をしてきた時代設定であるものが多い。そのため、現代では当たり前に使われている言葉を使用してしまうと、違和感があることがある。そこで入戸野（2009）では、「学生に『テレビ』『ケイタ

表2 入戸野（2009）の落語の授業

対象	アメリカの大学5年生 (日本語能力試験1級合格レベル)
目的	落語を演じる過程を通して、四技能（話す、聞く、読む、書く）を超えた「演じる力」をいかにして養うか、また「演じる力」を養うことが日本語の言語能力にいかなる影響を及ぼすかを調査すること
活動時間	・75分授業中、15分（授業は週に2回で、全24回） ・宿題、練習などのクラス外での活動を10時間ほど
主な活動内容	・落語に関する知識 ・落語における表現の工夫 ・落語を読む・覚える・演じる。 ・クラスメートの落語を聞く・評価する。 ・口演（予選会→春祭り）
使用した主な断	『まんじゅうこわい』『時そば』『あたま山』『高田馬場』『青菜』『転失気』
主な成果	・四技能の向上 ・「演じる力」の重要性に対する気づき

イ』『飛行機』など文明の利器」を、他の言い方にする活動を行った。当たり前に通じるとされる言葉を他の言い方で伝わるようにするという練習は、会話の中でも役に立つことである。話の中で、自分の言っていることが相手に伝わっていないと思われる際、何とか伝えようと別の言い方をする等の工夫をしなければならないからだ。

入戸野（2009）は、春祭り終了後の23回目のクラスで、この落語活動に関して学生に簡単なアンケートを実施している。アンケートの内容は、「聞く、書く、読む、話す、そして、演じる力」について、自分で上達したと思う能力に○をつけてもらうというものである。表3は、アンケートの集計結果である。

表3 落語活動を通してどの能力が伸びたと思うか

	話す力	聞く力	読む力	書く力	演じる力
回答者数(16人)	16	13	14	14	16

(回答者総数 2006年5人+2007年1人+2008年3人+2009年7人 計16人)
出典：入戸野（2009）。

入戸野氏は、この活動を2006年から行っており、このアンケートは、2006年から2009年までの4年間に参加した16名に行ったものである。この結果から入戸野（2009）は、「落語を演ずるという活動が学習者に総合学習の場を提供し、四技能に加えて、「五番目の技能」、すなわち、「演ずる能力」を養う有益な場であったことが分かった。」と分析している。それに加え、2007年に口演を行った学生からは、「日本語を本当の意味で身につけるには演じる力が必要だとわかった。」

という回答があったという。

入戸野（2009）から、落語の活動が、日本語能力の向上に影響がある可能性が示された。この授業実践は、上級レベルである学習者が対象で、既にかんりのレベルまで日本語能力が伸びていると思われる。そのため、それ以上の伸びしろがあまりないと考えられるにも関わらず、学習者は効果を感じている。また、通常の四技能（話す、聞く、読む、書く）に加え、「演ずる力」も日本語運用能力に必要なだと示されたのは大きい。日本語会話では、嘘の自分を見せるというわけではないが、ある程度「演ずる力」が必要である。例えば、感謝の気持ちを伝える場面で、相手にしっかり謝意が伝わるように、表情や声のトーン等を意識する必要がある。入戸野（2009）の学習者たちは、上級レベルに至るまで、様々な日本語の文章を読んだり、会話練習をしたりしてきたことだろう。しかし、日本語力を上げるのに精一杯で、表現力豊かに話せていたかどうかは不明だ。高度な日本語力に加え、「演ずる力」、つまり豊かに表現する術が身につけば、自分の考えや気持ちをより相手に伝えやすくなるのではないだろうか。その練習を初級の段階からできれば、すぐに日本語を使用することが求められる日本の外国人住民にとって画期的なものとなるだろう。

2.3. 川崎（2014）

川崎（2014）は、会話の際、相手に自分の考えや気持ちをより良く「伝える」ということを意識するのに落語が有効だと考える研究である。川崎（2014）は、「日本語教育においては、落語の言語的な側面、あるいは伝統芸能としての文化的な側面に焦点が当てられることが多い」ため、「グローバル人材育成が声高に提唱される今日の日本の教育界にあって、落語は社会のニーズと対極的な位置にある学習素材であるとされる」が、「見方を変え、落語が“話芸”であることに注目したとき、『伝える力』を養うための教材としての可能性が見えてくるのではないか。」との見解を示し、「『伝える力』は、まさにグローバル人材に必要な力である。」と述べている。

川崎（2014）も、筆者が注目した、前述の入戸野（2009）の中の「落語における表現の工夫」に注目し、「この練習によって、学習者は単に型通りのことばを覚えて口から発するのではなく、社会背景が異なる人々に対しての伝え方を意識すると考えられる。」と述べている。これを日本で暮らす外国人住民に置き換えると、文化の異なる日本での生活で、相手に何かを伝える際に工夫が必要だと考えるきっかけになるかもしれない。

また、同じく前述の畑佐・久保田（2009）の学習者の活動を、川崎（2014）は以下のように整理し、考え

を述べている。

- a. 題材の選択 → b. 小噺の暗記 →
- c. 小噺の反復練習 → d. 発表

川崎（2014）が行っている留学生対象の授業は、反復練習を通じて暗記までできれば完成とすることが多い。この練習順序を、上記の畑佐・久保田（2009）の学習者の活動順序（通常の落語の稽古と同様）と比較すると、bとcが反対となっていることが分かる。このことについて、川崎（2014）は、「反復練習は外国語学習にとって必要不可欠なものであろう。しかし、このような反復練習は型にはまり、本人の感情や場面に応じた発話ではないので意味がないという主張もある。」と述べている。そして、上記の畑佐・久保田（2009）の活動順序に注目し、「落語であるからこそ繰り返し練習する必要がある、落語であるからこそ感情を豊かに表現しなければならない。感情を表す練習を繰り返し行うことが、落語という教材を使って初めて可能になると言えるのである。」と、落語の練習方法により、豊かに表現ができる可能性を示唆した。

最後に、日本語教育における落語作品の利用の有効性、落語を利用した授業実践のプロセス、そして、「落語で学ぶ」ということを意識したコース・デザインの提案を行った森（2018）を取り上げる。筆者が目指す、落語の手法を取り入れた会話練習に向けて、大いに参考となる研究である。

2.4. 森（2018）

森（2018）も川崎（2014）同様、グローバル人材について言及しており、「グローバルな人材には言語能力だけでなくコミュニケーション能力が必須であり、これらの能力促進のためにも文化教育の果たす役割はますます重要になってきている。」と述べている。そして、落語を日本語授業において主教材とすることで、「言語および文化の二側面を効率よく導入する実践教育方法が構築できるのではないかと考えた」とある。

主教材としての落語スクリプトの有効性について、「話し言葉で構成される落語スクリプトは日本語教育に必要な文型・文法が中級レベルを中心に使われていることが分かり、これまでの『落語教材といえば上級』というイメージを塗り替え、中級レベルの日本語教育にも有効である」としている。本稿においては、初級レベルの学習者を想定しているが、表現を初級レベルに言い換えることにより、使える可能性はあると考えられる。

森（2018）は、中級レベルの日本語学習者を対象に

コース・デザインを行い、実践を行った。コース・デザインの際には、「日本語および日本文化の二側面を効率よく導入する」ということが意識されている。また、総合的な日本語力の促進を目指し、「畑佐・久保田（2009）の小噺活動を取り入れたコース・デザインを作成し、実践を試みた」とある。

表4 森（2018）の授業

対象	日本国内の大学のフランス人留学生4名 (日本語中級レベル)
目的	日本語学習と日本文化理解の両側面を同時に一連の活動において効率よく導入し、学習者の日本語力を促進すること。
活動時間	90分×15回授業のうち、約30%の時間
主な活動内容	・落語に関する知識 ・聴解、読解、文法 ・小噺活動 (詳細については、本稿では割愛する。森(2018)を参照されたい。)
使用した主な小噺	・『平林』『ときそば』等
主な成果	・幅広い日本語の理解、日本語力の向上 ・自律学習への貢献 ・非言語的な項目を学習する際の小噺活動の有効性

表4は、森（2018）が行った落語授業の概要である。森（2018）は、授業実践後の考察として以下のように述べている。

言語的側面として、登場人物の話し方から上下関係や役割語など異なるスピーチスタイルの理解、口演活動によるジェスチャーを伴った口頭能力の促進、落語鑑賞による聴解能力の促進などが挙げられる。文化的側面として、習慣や風習など歴史的な事柄も含めた日本文化が導入できる、落語鑑賞や口演など体験的学習ができるなどが挙げられる。また、その他の側面として、落語の登場人物は市井の人々が多いので国籍を問わず人間性などに共感できる、笑いを伴ったりリラックスした学習環境が作り出せる、口演活動により言語的および非言語的学習項目を身体を通して繰返し学習できる、口演活動により表現力やコミュニケーション能力が促進する、口演活動により自律学習や協働学習に貢献できる、口演発表に向けて主体的に学ぶ場を提供できるなどが挙げられる。

本稿においては、研究対象は初級レベルの学習者であり、森（2018）のようなコースを通して落語に触れるということは考えていない。しかし、「表現力やコミュニケーション能力が促進する」効果があるという点は本稿の目指すところであるため、参考にしたい研究である。

以上の先行研究を参考に、本稿における授業実践の計画を行いたい。

3. 授業概要

3.1. 授業計画

今回の授業計画は、表5の通りである。

表5 授業計画

対象	鳴門教育大学大学院に在籍する留学生（日本語初級前半レベル ³ ） 約19名 ⁴
目的	日本語会話の表現力、コミュニケーション力の向上
活動時間	・全15回授業中、第12回目授業以降の4回（授業時間1回90分の内、30分程度） ・クラス外での練習は任意とする。
活動内容	・落語に関する知識 ・落語における表現の工夫 ・小噺を読む・覚える・演じる。 ・クラスメートの落語を聞く。 ・発表会
取り上げる小噺	動画投稿サイトYouTube「【英語で笑って英語が身につく！】英語落語チャンネル」 ⁵ より6作品 『どこにある？』『笑いのセンス』『テストの点数』『ハイジャック』『痛み』『歯医者にて』

授業実践の対象は、鳴門教育大学大学院で筆者が担当している、日本語会話クラスで学ぶ、大学院留学生の日本語学習者とする。日本語のレベルは初級前半レベルである。各学習者の母語は異なるが、お互いの共通言語は英語で、学内での講義受講や研究は英語で行っている。筆者の会話クラスは、場面シラバスで行っている。そのため、文法クラスでは習っていない表現があるため、負担がないよう、ローマ字表記や英語での説明を行っている。

³ 本研究における「初級前半レベル」は、日本語能力試験N5レベルの内容を学習しているレベルとする。

⁴ 授業期間中に研究調査等で欠席し、最後の発表ができなかった学生もいる。

⁵ @user-uj6uf1mf7n (n.d.). 「【英語で笑って英語が身につく！】英語落語チャンネル」(最終閲覧：2022年10月15日) : <https://www.youtube.com/channel/UCtVVUU5QK6PGDpMzWaFcrpA/videos>

3.2. 授業の進め方

授業の進め方は、表6の通りである。

表6 授業内容と使用教材

回	内容	使用教材
①	a) 落語について知る。 b) 小噺に挑戦してみる。	・筆者作成のスライド ・動画投稿サイト「YouTube」の落語解説チャンネル「ダイアン吉日 落語 Rakugo Stories Episode 1」 ⁶ ・動画投稿サイト「YouTube」の英語小噺チャンネル「【英語で笑って英語が身につく!】英語落語チャンネル」 ・日本語の小噺スクリプト（上記の動画の小噺を筆者がやさしい日本語にしたもの）
②	表現することを意識しながら、小噺を演じる。（練習）	日本語の小噺スクリプト
③	表現することを意識しながら、小噺を演じる。（練習）	日本語の小噺スクリプト
④	発表会	日本語の小噺スクリプト

以下、それぞれの回の内容についての詳細を述べる。

① a) 落語について知る。

本授業実践では、英語での落語の説明を行うこととした。理由は、初級前半レベルであることに加え、本研究の目的は、あくまで落語の特性を活かした会話練習であるため、落語についての理解には時間をかけないことにした。

説明は、まず、教師である筆者が、スライドを用いて簡単に行った後、確認のため、動画投稿サイト「YouTube」のダイアン吉日氏による英語での落語説明動画を視聴する。

① b) 小噺に挑戦してみる。

① a)と同じく、動画投稿サイト「YouTube」に投稿されている、桂かい枝氏、及び、桂福龍氏による英語落語の動画を視聴する。これも同じく、落語についての理解に時間をかけないため、英語で演じられているものを選択することとした。そして、それぞれ作品の面白さを英語で理解したところで、なるべくやさしい日本語で筆者が書き換えたスクリプトを示し、日本語で小噺に挑戦する。

②/③ 表現することを意識しながら、小噺を演じる。（練習）

初回で、落語について学び、落語の面白さを知った上で、その面白さを表現する技術について伝える。登場人物によって顔の向きを変える「上下を切る」という落語独特の技術や顔の表情などを意識することで、小噺を表現力豊かに演じられることを意識できるようにする。

④ 発表会

取り上げた6つの小噺から2作品を演じてもらう。1つは全員共通で『どこにある?』、もう1つは残りの5作品から、各自好きなものを選択することとする。今回は、あくまで実験的な授業実践のため、暗記は強要せず、登場人物を演じ分けながら、楽しく話すことを目的とする。

4. 授業実践の結果

4.1. 発表会までの学習者の様子

初回視聴した、動画投稿サイトのダイアン吉日氏の落語解説を見ながらクスクス笑ったり、桂かい枝・桂福龍両氏の小噺を見て思わず吹き出して笑ったりする学習者もいた。また、まだ導入したばかりにも関わらず、「落語はどこへ行けば見られるのか」という質問があり、落語・小噺についての基本的な理解と面白さについては、よく伝わったようである。これは、理解しやすい英語で導入したことが大きいだろう。

小噺の練習については、消極的な学習者がいるかもしれないと心配していたが、そのようなことはなく、積極的に参加し、繰り返し練習していた。

最終の発表会では、今回は暗記を求めなかったにも関わらず、なるべく覚えて発表しようとしている学習者が多く見られた。また、普段の会話の授業では、会話文を読むのが精一杯の学習者や、よく話す学習者の陰に隠れてしまいがちな控えめな学習者が、大きな声で、身体を動かし、表情をつけながら発表していたのが印象的であった。

4.2. 発表会後の会話練習の様子

最終の授業で、小噺の発表会を行い、残りの時間でこれまで練習した会話文の復習をすることにした。その際に、「Rakugo Practice!」と言って、落語の特性を活かした会話練習ができるように指示した。具体的には、まず、小噺の練習のように、上下を切りながら会

⁶ EnglishStarJapan (2009) .「ダイアン吉日 落語 Rakugo Stories Episode 1」(最終閲覧:2022年10月15日):
<https://www.youtube.com/watch?v=liuW8ITNYJk>

話文を1人で練習し、その後、通常のペアでの練習を試みることにした。

1人で練習している様子を見ていると、発表会直後で、その余韻が残っていたのもあると思うが、それまでの会話文の読み方と異なり、表現力豊かに話している学習者が多かった。これは、川崎（2014）が通常の外国語の学習時は、反復練習の後、その表現を覚えれば終わりとしているのに対し、落語の稽古は、覚えてから反復練習をするもので、それにより、豊かに表現ができる可能性を示唆していたことと重なる。つまり、これまでに練習した会話文の復習で、完全ではないにしても、何となく覚えている表現であったため、覚えた会話文を、小断練習でしたように表現豊かに話すことができたと考えられる。

5. おわりに（まとめと今後の課題）

今回は、今後行う予定の授業実践の実験的なものであり、小断の活用が日本語会話能力にどの程度効果があるのか、現時点では結論は出ていない。しかし、小断練習を取り入れた前後で、多くの学習者の会話文の読み方に変化があったことは、大きな収穫であった。

今後は、この会話練習方法を、日本語会話練習における「落語メソッド」と名付けて引き続き効果を検証していきたい。そのためには、以下の3点の課題を検討する必要がある。

① 評価方法

学習者が暗記できるまで小断を練習した後、会話文の読み方の変化をどう評価するかを検討していく必要がある。

② 上級レベル学習者との比較

本稿では初級レベルの学習者にこの練習方法の効果があるとしたが、果たして本当にそうであるのか、上級レベルの学習者との比較も必要である。

③ 英語以外の言語での導入方法

今回は落語解説や小断を英語で導入できたため、日本語初級レベルの学習者に対しても効果があったと言える。しかし、英語で導入できる学習者ばかりではない。そのため、「落語メソッド」の構築のためには、英語では理解ができない日本語初級レベル学習者の会話の表現力の向上のために、落語・小断をどう活用すべきか、考えていく必要がある。

再び増加すると見込まれる外国人住民の方々が、日本語でより良いコミュニケーションができることを目指し、本研究を引き続き行う予定である。

謝辞

今回の授業実践を快く受け入れてくださった留学生の皆様、そして、筆者の授業実践に興味をお持ちくださった廣田知子先生に心より御礼申し上げます。

参考文献

- @user-uj6uf1mf7n (n.d.). 「【英語で笑って英語が身につく!】英語落語チャンネル」(最終閲覧:2022年10月15日): <https://www.youtube.com/channel/UCtVVVU5QK6PGDpMzWaFcrpA/videos>
- EnglishStarJapan (2009). 「ダイアン吉日 落語 Rakugo Stories Episode 1」(最終閲覧:2022年10月15日): <https://www.youtube.com/watch?v=liuW8ITNYJk>
- 川崎加奈子(2014). 「『落語』と『グローバル人材育成』 - 伝える力を養う教材としての落語の可能性 - 」, 『長崎外大論叢』, 18, pp.41-54.
- 総務省(2022). 「住民基本台帳に基づく人口, 人口動態及び世帯数(令和4年1月1日現在)」(最終閲覧:2022年10月15日): https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/daityo/jinkou_jinkoudoutai-setaisuu.html
- 千葉落語同好会(1999). 「新作小断集」(最終閲覧:2022年10月15日): <http://tibaraku.web.fc2.com/kobanasi/sinhome.html>
- 入野野みはる(2009). 「コテンラクゴ? 演るんですか?? 演るんです!: 五技能の習得をめざして」, 第16回プリンストン日本語教育フォーラム, pp.32-41. (最終閲覧:2022年10月15日): <https://pjpj.princeton.edu/past-forums/2009>
- 畑佐一味・久保田佐由利(2009). 「一人で演じる日本語会話: 小断プロジェクトの実践報告」, 第16回プリンストン日本語教育フォーラム, pp.20-31. (最終閲覧:2022年10月15日): <https://pjpj.princeton.edu/past-forums/2009>
- 森真由美(2018). 「落語を利用した日本語教育の研究」, 金城学院大学 博士論文
- 米本和弘・曾我部絢香(2012). 「初級後半での落語を用いた授業活動の実践報告」, 『Journal CAJLE』, 13, pp.63-83.